

家族機能からみた大学生の自我同一性の形成について

内田 利広・越知 照子*

A Study on Ego Identity Status of the University Student in Terms of Family Functioning

Toshihiro UCHIDA, Teruko OCHI*

Accepted December 18, 2008

抄録: 本研究では「小学校の頃」と「現在」の家族機能の認知の変化と自我同一性地位にどのような関連があるかをみるために、大学生を対象に質問紙調査を行った。家族機能の『凝集性』『社会活動性』『拘束性』の3因子それぞれにおいて、自我同一性地位群×家族機能の2要因の分散分析を行った。その結果、同一性達成群が凝集性を小学校の頃の家族より現在の家族において高く認知していること、拘束性を小学校の頃の家族より現在の家族において低く認知していることがわかった。そのことより、小学生の頃の家族に比べて現在の家族の結びつきはより強く、締め付けられる力はより弱く認知することが同一性を達成できることに関係すると結論づけられた。

索引語: 家族機能の変化, 大学生, 自我同一性地位

Abstract : To research what relations between the ego identity status and the change of family function between “Elementary school” and “Present,” a questionnaire was administrated to university students, and analyzed. For each of the three factors, “cohesion,” “social activity,” and “restraint” of the family function, I performed an analysis of variance of two factors: ego identity status, family function. As a result, it was shown that the identity achievement group recognized “cohesion” in their current family more than in the days of upper the elementary school, and “restraint” in their current family more than in the days of lower the elementary school. I come to the conclusion that it related to the identity achievement, recognizing the cohesion of the current family were stronger and the restraint of the current family were weaker than a family in the days of the primary schoolchild

Key Words : change of family function, university students, ego identity status

* 京都市立衣笠小学校教諭（平成17年度本学大学院修了生）

I 問題と目的

小此木（1978）は、現代青年のしらけや自我分裂、遊び感覚といった特徴に注目し、こうした否定的な特徴をもつ青年群をあらわした『モラトリアム人間』、社会的に自立した大人になることを拒否・回避した『大人になりたくない子ども』、「大人・子ども」の状態をあらわす『ピーター・パン症候群』、理想の男性に守ってもらいたいという願望が強く、自立できない女性のことをあらわす『シンデレラ・コンプレックス』などのいろいろな言葉で表した。これらの言葉からわかるように、青年の自立に関する問題は年々増えてきている。さらに、近年ではフリーターの増加もさることながら、ニート（Not in Education, Employment, or Training）という働かず、学校にも通っていない、仕事につくための専門的な訓練も受けていない若者が増えてきている。そのニートの4人のうち3人以上が親と同居しており、生活費をまかなう収入源の70.1%が家族や親族の給与・収入であること（玄田・曲沼，2004），また『パラサイト・シングル』という結婚せずに親に甘えながら好き勝手に生きる若者が増えてきていることなどから考えても、青年期に自立できない若者が増えていることがわかる。

青年期というのは、「自分がわからない」「将来が不安で仕方がない」「自分はこの世になんのために生まれたのだろうか」「自分が生きている意味は何だろうか」ということが常に悩みの中心にあり、心の問題は大体において「自己」「自分」に深い関係をもっている時期といわれている（鑑，2002）。Erikson, E.H. は、『幼児期と社会』（1950）の中で、人間の全生涯を展望に入れて人格発達の心理社会的側面を個体発達分化の図式で表した。その中で、Erikson は青年期に達成することが主な課題となってくる自我の統合された状態を、アイデンティティ（identity）と呼び、思春期・青年期にわれわれが遭遇しなければならない危機を「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」として概念化した。この極めて包括的で抽象度の高い同一性概念を実証的研究の対象とするために、多くの試みが行われてきているが、それらは同一性を概念化する様式において2群に大別できる。

まず第1群は、同一性を「拡散」と「統合」とを両極とする1次元をなすものとしてとらえるアプローチである。同一性の達成の程度は、それに付随すると考えられる諸特徴の水準に基づいて、1次の上に位置づけられる。ここでは、同一性が成立する過程および機構は、必ずしも問題にされていない（加藤，1983）。

そして、第2群は、Marcia, J.E.（1966）による同一性地位（identity status）アプローチである。Marcia は心理・社会的領域として、職業とイデオロギー（宗教と政治）を設定した。そして内容としては、①社会的役割を自分のものにする試みや意志を決定する葛藤の期間が示されているかどうか、つまり「危機（crisis）」を経験しているかどうか、②人生の重要な領域である職業とイデオロギーにおいて、「積極的関与（commitment）」が見られるかどうかを基準とした。そして、この「危機」と「積極的関与」の有無の組合せから、同一性達成地位（identity achievement status）、早期完了地位（foreclosure status）、積極的モラトリアム地位（moratorium status）、同一性拡散地位（identity diffusion status）の4つの自我同一性地位を導き出した（表1）（鑑，2002）。

表 1 Marcia の自我同一性地位群の定義（無藤，1979）

自我同一性 地位	危機 (crisis)	自己投入 (commitment)	概略
同一性達成 (identity achievement)	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなり いくつかの可能性について本気で考えた末、 自分自身の解決に達して、それに基づいて行 動している。
モラトリアム (moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところ で、その不確かさを克服しようと一生懸命努力 している。
早期完了 (foreclosure)	経験して いない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。 どんな体験も、幼児期以来の信念の補強する だけになっている。硬さ(融通のきかなさ)が特 徴的。
同一性拡散 (identity diffusion)	経験して いない	していない	危機前: 今まで本当に何者であった経験がな いので、何者かである自分を想像することが 不可能。
	経験した	していない	危機後: 全てのことが可能だし可能なままにし ておかなければならない。

加藤（1983）は、Marcia の「危機」及び「積極的関与」の概念に着目して、領域を区別しない一般的ステイタスを測定する尺度を開発した。ただし、「危機」については「過去」と「現在」（「現在」の方は、「将来の自己投入の希求」という用語を使用している）の 2 つに分けて測定し、また、「積極的関与」は、「現在の自己投入」という用語で表現されている（本研究でも「自己投入」の訳語を使用する）。そして、(1) 現在の自己投入 (2) 過去の危機 (3) 将来の自己投入の希求の 3 変数を測定し、最終的なステイタスは、①同一性達成地位、②早期完了地位、③同一性達成－早期完了中間地位、④積極的モラトリアム地位、⑤同一性拡散地位、⑥同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位のいずれかに分類した。

その中で、加藤（1983）は同一性の形成において重要な領域についても調べているが、その中で「家族との関係」に、ある程度の関連を見出している。また、渡辺（1989）は、大学生（大学院生を含む）307 名に家族機能と自我同一性地位の関係をみるために質問紙調査を行っている。その結果、表現性・民主的家族形態といった家族機能の肯定的側面と関連があるのは、同一性達成と早期完了であったこと、逆に、家族機能の否定的側面（遊離性・放任的家族形態など）と正の関連があるのは同一性拡散であり、同一性達成と早期完了の反対側に位置していること、モラトリアムは、権威的家族形態と纏綿性で関連があるだけであったことがわかっている。権威的家族形態の特性を持つということにおいて早期完了と共通点をもっているが、早期完了での肯定的側面との結びつきといったものは、モラトリアムでは全くみられないことがその特徴であろう。また、モラトリアムと求心的家族、同一性拡散と遠心的家族の関連があること、また、早期完了と同一性達成の家族は外界に働きかける活動をし、早期完了の方がより凝集性の高い家族として見られることが明らかとなっている。

さて、渡辺（1989）の研究の中で、家族機能の肯定的側面が、同一性達成だけでなく早期完了とも関連があるとしているが、そこに疑問が感じられる。早期完了というのは、自己投入はしているが、危

機を経験せず自分の目標と親の目標の間に不協和がなく、どんな体験も幼児期以来の信念を補強するだけになっているとされる地位である。危機を経験していないというのがこの地位の特徴であり、同一性達成と異なるところである。では、なぜ家族機能の肯定的側面との関連がみられたのかということを見ると、危機を経験するのが思春期という青年期より少し前であるということと関係するのではないかと考えた。

家族というものは、時とともに変化するもので、すべての家族は、そのライフ・コースを通して一定の諸段階を経過して発達する。ちょうど個人の生涯発達論が、心理—社会的な援助や介入の前提になるように、家族発達段階論が、家族心理学的援助には不可欠の条件である（岡堂，1991）。McGoldrickら（1982）は、「家族によってやりぬかれるべき中心的・根本的プロセスとは、家族成員をうまく加入させ、退出させ、発達させることを支持するように、関係システムを拡大、縮小、そして再編成すること」とみている（Philip Barker1993 より）。心理学的にみると、家族発達の各段階にはその段階固有の生活現象があり、すべての家族成員に適応と変化を求める新しい課題がある。これは、家族にとって危機となることがあるし、緊張と組織の動揺がみられる。だが、家族はこの課題に取り組みながら、再組織化することで、安定した状態に達することが可能になるとされている（岡堂，1992）。このように、家族は常にダイナミックに動きつつ、相互の関係を調整しあうとされており、その家族の変化が個人の発達に何かしらの影響を与えていると思われる。そこで、先ほどの渡辺（1989）の研究に、家族機能の変化の視点をいれることで、同一性の達成と関連する家族機能のより明確な示唆が得られるのではないかと考えた。

よって、本研究では家族機能がどのように変化することが青年期の自我同一性の形成に関連するのかを検討するために、青年期である大学生を対象に調査を行うこととした。家族の変化をみる方法として、大学生に「現在」だけでなく「小学生の頃」の家族についても同じ質問に答えてもらうことにした。大学生が「小学校の頃」の家族を思い出すということは、実際の「小学校の頃」を正確に表すものではないかもしれないが、「現在」の自分が「小学校の頃」の家族をどのように認知していたのかということが自我同一性の形成に関係するのではないかと考えこの方法をとることにした。また、「小学校の頃」にしたのは、思春期よりも以前である方が青年期である「現在」との変化を見る上でよいと考えたからである。

Ⅱ 調査方法

調査対象者と調査方法

調査対象者は、近畿圏の大学生 238 名。平均年齢 19.9 歳で、対象者の内訳は、表 2 に示したとおりである。調査方法は授業中、または個別に依頼した。

表 2 調査対象者の分布

	1回生	2回生	3回生	4回生	5回生以上	合計
男子	1	62	6	10	1	80
女子	15	109	14	19	1	158
合計	16	171	20	29	2	238

実施時期

2005 年 4, 9, 10 月

質問紙の構成**①家族機能**

Bloom, B.L. (1985) による, 家族機能自己記述尺度 (Self-Report Measures of Family Functioning; 以下, SMFF とする) を, 渡辺 (1989) が和訳したものを用いた。SMFF は, van der Veen, F., Moos, R.H., Olson, D.H., Skinner, M. らの家族調査の質問項目をまとめ作成し直したものである。家族機能の 15 の下位特性 (結合性, 表現性, 葛藤, 知的文化的態度, 活動的レクリエーションの態度, 宗教の強調, 秩序, 家族社交性, 外的統制位置, 家族理想化, 放任的家族形態, 民主的家族形態, 遊離性, 権威的家族形態, 纏綿性) に, 5 項目ずつ質問文が含まれ, [あてはまる。少しあてはまる, 余りあてはまらない, あてはまらない] の 4 段階評定によって回答されるものである。本研究では, それぞれの質問文について, 「小学校の頃」と「現在」の家族について答えてもらった。「小学校の頃」は質問文を過去形で提示し, 「小学校の頃」と「現在」の家族の質問項目の順番は異なるものを使用した。

(例) 「家族の人々は, 心に思ったことを自由に話せる。(現在)」→「家族の人々は, 心に思ったことを自由に話せた。(小学校の頃)」

②自我同一性地位

加藤 (1983) による同一性地位判定尺度を用いた。この尺度は Marcia の定義した危機・自己投入に将来への展望を加えた以下計 3 変数をそれぞれ測定し, その組合せから同一性地位の判定を行うものである。

- (1) 一般的な (領域を特定しない) 「現在の自己投入」の水準
- (2) 一般的な「過去の危機」の水準
- (3) 一般的な「将来の自己投入の希求」の水準

各変数につき 4 項目, 計 12 項目からなり, 回答法は「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの 6 件法とし, 最も高い水準に対応する反応を 6 点, 最も低い水準に対応する反応を 1 点として, 4 項目の合計得点を各変数の値とした。

Ⅲ 結果**①自我同一性地位について**

「同一性地位判定尺度」で測定した 3 領域のそれぞれの平均点は, 「現在の自己投入」が $M = 17.0$ ($SD = 4.2$), 「過去の危機の経験」が $M = 17.8$ ($SD = 3.2$), 「将来の自己投入の希求」が $M = 17.1$ ($SD = 3.1$) であった。加藤 (1983) では, 「現在の自己投入」が $M = 17.2$ ($SD = 3.3$), 「過去の危機の経験」が $M = 17.8$ ($SD = 3.1$), 「将来の自己投入の希求」が $M = 17.5$ ($SD = 3.1$) であり, 本研究の結果とほとんど同じ値であった。地位の分け方は, 3 領域とも, 平均点より高ければ高群, 低ければ低

群とし、加藤の自我同一性地位の定義より4つの地位に分類した(表3)。内訳は表4のようになった。

表3 自我同一性地位群の定義

同一性地位群	加藤の定義	群分けの基準
同一性達成群	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っているもの	過去高群かつ現在高群のもの
早期完了群	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者	過去低群かつ現在高群のもの
モラトリウム群	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めているもの	現在低群かつ将来高群のもの
同一性拡散群	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いもの	現在低群かつ将来低群のもの

表4 同一性達成群の人数分布

	同一性達成群	早期完了群	モラトリウム群	同一性拡散群	合計
男子	20	25	6	29	80
女子	39	27	46	46	158
合計	59	52	52	75	238

②家族機能について

(1) 家族機能の因子構造

SMFFの15の下位特性を「小学校の頃」と「現在」で、先行研究と同じく、主因子法、バリマックス回転で因子分析を行った。その結果、先行研究と同じく、因子Ⅰは家族のまとまりをあらわす『凝集性』、因子Ⅱは家族が外界と交流をもつ『社会活動性』、因子Ⅲは家族内で締め付けられる力をあらわす『拘束性』を「小学校の頃」も「現在」も示していた(表5, 6)。よって、「小学校の頃」の信頼性もある程度あると判断した。

以下の分析では、同じ因子内の同じ項目のみを使って行うことにした。よって、

表5 「小学生の頃」の家族機能の因子構造

	因子Ⅰ (凝集性)	因子Ⅱ (社会活動性)	因子Ⅲ (拘束性)	共通性
表現性	0.73	0.31	-0.09	0.64
結合性	0.69	0.45	-0.08	0.69
放任的	-0.69	-0.27	-0.01	0.55
家族理想化	0.67	0.20	-0.11	0.51
民主的	0.55	0.16	-0.08	0.33
活動的リクリエーションの態度	0.17	0.85	-0.06	0.76
家族社交性	0.27	0.62	-0.20	0.50
知的文化態度	0.23	0.47	0.07	0.28
外的統制位置	-0.37	-0.42	0.35	0.43
権威的	-0.05	0.02	0.65	0.43
葛藤	-0.34	-0.11	0.54	0.42
纏綿性	0.33	-0.07	0.40	0.28
因子寄与	2.76	1.96	1.08	
累積寄与率	23.01	39.38	48.40	

『凝集性』には、結合性、表現性、放任的家族形態（逆転項目）、家族理想化、民主的家族形態の 5 下位特性、『社会活動性』には、活動的リクリエーションの態度、家族社交性の 2 下位特性、『拘束性』には、権威的家族形態、葛藤、纏綿性の 3 下位特性を含めることとする。

表 6 「現在」の家族機能の因子構造

	因子Ⅰ (凝集性)	因子Ⅱ (社会活動性)	因子Ⅲ (拘束性)	共通性
結合性	0.84	0.34	-0.07	0.83
表現性	0.79	0.30	-0.10	0.72
放任的	-0.74	-0.16	0.05	0.58
家族理想化	0.71	0.20	-0.10	0.55
民主的	0.70	0.19	0.01	0.52
外的統制位置	-0.56	-0.27	0.38	0.53
活動的リクリエーションの態度	0.29	0.72	-0.01	0.60
家族社交性	0.31	0.69	-0.12	0.59
権威的	-0.11	-0.07	0.67	0.46
葛藤	-0.22	0.06	0.53	0.33
纏綿性	0.28	-0.11	0.47	0.31
因子寄与	3.49	1.40	1.14	
累積寄与率	31.75	44.49	54.82	

③家族機能と自我同一性地位の関係について

「小学校の頃」と「現在」の家族機能が、自我同一性地位とどのような関連があるかを調べるために、家族機能の『凝集性』『社会活動性』『拘束性』の 3 因子それぞれにおいて、自我同一性地位群×家族機能（「小学校の頃」「現在」）の 2 要因の分散分析を行った（表 7）。

表 7 家族機能と同一性地位群の 2 要因の分散分析

		平均(SD)				主効果		交互作用
		同一性達成	早期完了	モラトリアム	同一性拡散	家族機能	同一性地位群	
凝集性	小学校	2.73(.48)	2.80(.42)	2.70(.41)	2.55(.40)	13.30**	4.77**	5.22**
	現在	2.92(.53)	2.83(.53)	2.72(.49)	2.58(.44)	小<現	A>D、F>D	小:F>D**、現:A>D**F>D*、A:小<現**
社会活動性	小学校	2.90(.48)	2.84(.52)	2.75(.53)	2.50(.53)	25.60**	7.69**	1.58
	現在	2.83(.56)	2.69(.57)	2.55(.51)	2.45(.49)	小>現	A>D、F>D、M>D	
拘束性	小学校	2.33(.43)	2.17(.37)	2.25(.37)	2.28(.39)	131.86**	1.28	4.92**
	現在	2.00(.36)	1.97(.37)	2.07(.45)	2.12(.38)	小>現		A:小>現**、F:小>現**、M:小>現**、D:小>現**

** : p<.01, * : p<.05

A: 同一性達成群 F: 早期完了群
M: モラトリアム群 D: 同一性拡散群

それぞれの地位の家族機能の「小学校の頃」と「現在」の変化をみるために、表 7 の結果の交互作用に着目する。交互作用は『凝集性』($F(1,237)=5.22, p < .01$)と『拘束性』($F(1,237)=4.92, p < .01$)において有意であった。

単純主効果の検定の結果、『凝集性』においては、「小学校の頃」で早期完了群が同一性拡散群より有意に高く、「現在」で同一性達成群と早期完了群が同一性拡散群より有意に高かった。また、同一性達成群で『凝集性』の「現在」が「小学校の頃」より有意に高かった(図 1)。

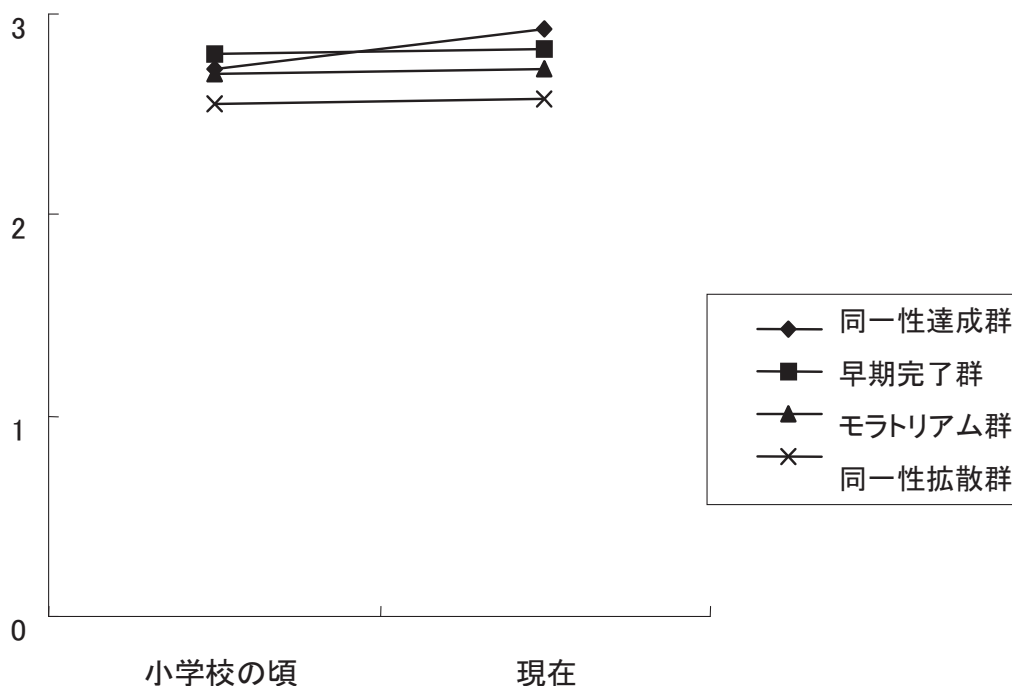


図 1 凝集性における交互作用

『拘束性』においては、交互作用が有意であったものの、「小学校の頃」と「現在」のそれぞれにおいて群差が有意であったものはなかった(図 2)。単純主効果の結果、4 群すべてで「小学校の頃」よりも「現在」のほうを低く認知していたが、交互作用を説明するものではなかった。これは群の人数が 50 人以上であり多すぎたことと標本の偏りが原因ではないかと思われる。グラフをみると、同一性達成群において、特に「小学校の頃」と「現在」の差が他の 3 群よりも大きく、おそらくその点において交互作用が有意であったと思われる。

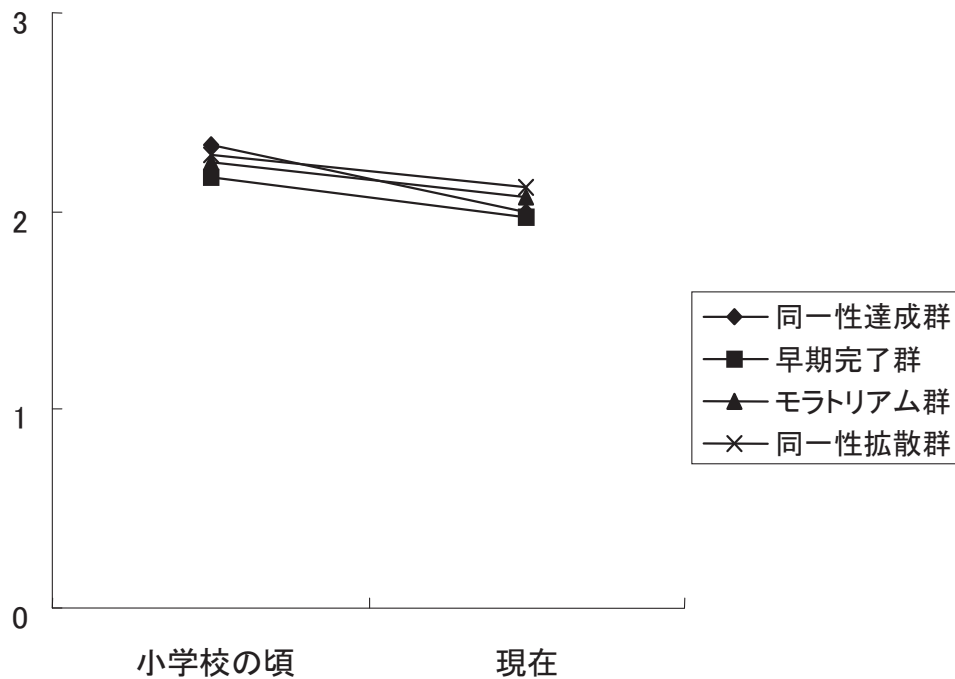


図2 拘束性における交互作用

IV 考察

家族機能と同一性地位群の交互作用の結果より、同一性達成群が『凝集性』と『拘束性』の認知の変化で他の3群と異なることが示された。具体的には、同一性達成群が家族の凝集性を小学校の頃の家族より現在の家族においてより高く認知していること、家族の拘束性を小学校の頃の家族より現在の家族においてより低く認知していることがわかった。つまり、同一性を達成するためには、小学校の頃の家族よりも現在の家族がよりよくまとまろうとしていること、一方家族内の締め付ける力がより弱まっていること、の両方の変化を大きく認知することが必要であるということである。家族がよりよくまとまろうとすることを示す『凝集性』と、家族の締め付ける力を示す『拘束性』というのは、どちらも家族のかかわり合いにおいて、家族内に向かうものであるが、大きな違いは、成員に自由な意志があるかないかということである。『凝集性』は、成員がそれぞれに自由な意志をもちながら、それを表現していくことで家族がよりよくまとまっていこうとするものであるが、『拘束性』は、家族の締め付ける力によって、家族成員それぞれの自由な意志が持てなくなっているものであると考える。「小学校の頃」の家族内の締め付ける力は、思春期になり自分というものを考えるようになるにつれて疑問視するようになり、自分とは何者かということを探り考え試行する危機を経験していくことにつながる。だがそこで、家族内の締め付ける力が強いと認知したままだと、その力に押さえつけられて自由な意志がもてなくなってしまう、危機を経験できなくなったり、危機を経験したとしても、その後自分とは何者で何を目標とするかがわからず、それに向けて努力していくことができなくなったりしてしまうかもしれない。しかし、そこで家族内の締め付ける力が弱くなっており、自分の考えや

意見を家族内でいうことで家族がよりよくまとまろうとしていると認知できれば、それは、危機を経験した上で、自由な意志をもつことにつながり、自分とは何かという答えを見出し、それに向けて努力していけると考えられるのではないだろうか。スティリアン（1973）は、「求心的である『締め付ける力』と遠心的である『排除する力』は青年の自立を左右し、巣立ちの時期を早めたり遅くしたりする。青年が自立する時期を過ぎても家族からの締め付ける力が強いと、青年は外に出ようとするほど危機を感じ、モラトリアムの真っ只中になることになる。そして、青年がそこに安定し、自己の価値観を親の価値観に合わせると、早期完了に移行して、本物の同一性を達成し得ない。」と述べている。本研究の結果はこの考えを支持する結果であった。子どもが自立し精神的成長を成し遂げるには、青年期の家族の凝集性が高いということだけでなく、児童期、思春期、青春期というライフサイクルの中で、家族がよりまとまろうとしていると認知するとともに、締め付ける力もだんだんと弱まってくると認知することが必要なのではないかと考える。

V 参考・引用文献

- Bloom, B. L. 1985, A factor analysis of self-report measures of family functioning, *Family Process*, 24
- 玄田有史・曲沼美恵, 2004, ニート：フリーターでもなく失業者でもなく, 幻冬舎
- 加藤厚, 1983, 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31 (4) : 292-302
- 柏木恵子, 1998, ジェンダーからみた家族, 国立婦人教育会館研究紀要, 2 : 1-2
- McGoldrick, M. 1982, Ethnicity and family therapy: an overview, (*Family Therapy in Schizophrenia*. ed. McFarlane, W.R.), New York: Guilford
- Marcia, J.E. 1966, Development and validation of ego identity status, *J. Personal. Soc. Psychol.* (3)
- 村瀬孝雄, 1976, 青年期危機概念をめぐる実証的考察, (笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編：青年の精神病理 1), 弘文堂
- 村瀬孝雄, 1981, 現代学生における自己確立の諸相, (笠原嘉・山田和夫編：キャンパスの症候群), 弘文堂
- 無藤清子, 1979, 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, 教育心理学研究, 27 (3) : 178-187
- 中釜洋子, 2001a, 家族療法から見た家族 (児童心理学の進歩 2001 年版), 金子書房
- 中釜洋子, 2001b, 4 部 4 章 家族の発達 (丹野義彦・下山晴彦編, 講座臨床心理学 5 (発達臨床心理学)), 東京大学出版会
- 中村淳子・秋葉英則, 1992, 青年期における家族機能認知について—自我同一性地位との関わりから—, 大阪教育大学紀要, 41 (1) : 11-23
- 岡堂哲雄, 1991, 家族心理学講義, 金子書房
- 岡堂哲雄, 1999, 家族心理学の課題と方法 (序論) 家族のライフ・コースと発達段階 (7 章) (岡堂哲雄編 家族心理学入門 (補訂版)), 培風館
- 小此木啓吾, 1978, モラトリアム人間の時代, 中央公論新社
- Philip Barker (中村伸一・信国恵子監訳), 1993, 家族療法の基礎, 金剛出版
- 下山晴彦, 1997, 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として—, 東京大学出版会
- 返田健, 1991, 大学生の自我同一性に関する研究 (3), 岐阜大学教養部研究報告第 27 号

Stierlin,H. 1973, A family perspective on adolescent runaway, *Archives of General Psychiatry*, 12 : 56-62

鐘幹八郎, 2002, アイデンティティとライフサイクル論 (鐘幹八郎著作集 I), ナカニシヤ出版

内田伸子, 2002, 発達心理学, 放送大学大学院

安村直己, 1992, 第3部 心理療法 3 [22] 家族療法 (氏原寛 小川捷之, 東山紘久, 村瀬孝雄, 山中康裕共編 心理臨床大事典), 培風館

渡辺さちや, 1989, 家族機能と自我同一性地位のかかわりー青年期の自立をめぐってー, 家族心理学研究, 3 (2)